

研究成果および研究計画

梅田 亨

研究成果のまとめ

研究の基本的な関心は双対性にある。

大学院 (修士・博士) では、主に函数解析的手法による、表現の一般論および具体的な表現の構成に関する問題を扱った。特に、辰馬双対定理の簡明な扱い [1]、局所コンパクト群 G 上の $L^\infty(G)$ に於ける双対定理 (交換子定理) [2] などを行い、また、シンプレクティック群の被覆群の表現の構成をした [3]。最後のものは、数論に於ける高次相互法則への応用を狙った久保田富雄氏の発想に導かれてのことである。

博士論文では、より代数的な古典型リー環の冪零元の共軛性の特別な現象について研究をした [4]。この解析の手法にも、対称群の表現のみならず、円分多項式などの数論的なものなどさまざまなものを用いている。

以上は、どちらかというと散発的な結果であるが、1989年に渡米し、イエール大学ハウ (R. Howe) 教授と共同研究をしたことが大きな転機となり、ハウ教授の代表的研究である dual pair 理論 (これも双対定理の形をとる) と、その微分作用素に於ける具体的表示であるカペリ (Capelli) 恒等式とその一般化について、系統的な研究を行うことになった [5]。この論文は、その後の (世界の) どの研究でも必ず引用される決定的な方向を示したものである。

その後、その量子群版であるとか、関連した研究を通じてカペリ恒等式とその変種・関連分野について、基礎的、および発展的な研究を進めてきた ([6][8][10][11][12][14][15][16][19][21] など)。カペリ恒等式とは、普遍包絡環の中心を表現に於ける不変微分作用素として書くものであるが、その中に双対性が集約されるのである。それらの概説については、日本語論説のほか、その英訳 [13] と、それ以降の技法をまとめた [17] などで標準的な考え方を示した。

これらの研究に関係して、特殊函数、特に超幾何多項式と、双対定理が密接につながっていることの指摘も、興味深い視点である。

それ以外に (時に関係はするが)、古い論文の解説を通じて、それを現代に甦らせる手法を [12][16][18][19] などの論文で実現した。